2020年度 総合研究所特別研究員 研究活動報告

氏名	村田 真一
研究テーマ	八幡・応神同体説について―「弘仁官符」から『建立縁起』へ―
研究概要	八幡神と応神天皇の同体説については、これまで奈良時代以前の八幡信仰の発生と関連づけられて論じられる傾向が強かった。しかし、文献上に直接に表現される八幡・応神同体説は、平安時代初期から中期にかけて、八幡神が国家神として深化する過程が読み取りうるものとしてあらわれている。本研究ではとくに『東大寺要録』所収のいわゆる「弘仁官符」から『宇佐八幡宮弥勒寺建立縁起』へ展開する宇佐宮祭神の性質の変容を中心に着目しつつ、八幡・応神同体説出現の歴史的な様相と意義を明らかにする。

1.研究活動の概要と研究成果	「応令大神宇佐二氏任八幡大菩薩宮司事」と題する弘仁12年の太政官符（「弘仁官符」）には、大神氏を中心に伝統的氏族による祭祀の必要性を訴える「大神清麿等解状」の引載があり、その冒頭に「件大菩薩是亦太上天皇御霊也」とある。従来、多くの研究で八幡応神同体説と解されてきたが、飯沼賢司は「太上天皇」が聖武天皇を指すとした。これを受けて「弘仁官符」を検討すると、八幡神と聖武に密接な関係が結ばれており「太上天皇」は聖武と見て誤りない。対して、平安時代中期の成立と推定される『宇佐八幡宮弥勒寺建立縁起』は、宇佐宮が「八幡大菩薩」の祭祀にふさわしい仏教寺院的空間となっていく過程を祭祀氏族辛嶋氏の職掌と共に語る縁起である。『建立縁起』は「弘仁官符」と共通部分が多く参照関係は明らかだが、冒頭に「右大御神者、是品太天皇御霊也」とあって「弘仁官符」の「太上天皇」＝聖武から「品太天皇」＝応神へと変化しており、また神功皇后が祭神として加わっている。貞観年間の石清水宮創建を語る『石清水八幡宮護国寺略記』では三座の祭殿の建立があり、すでに神功は祭神であったと考えられるが、奈良時代以来、宇佐宮八幡神と香椎宮神功皇后は国家的祭祀の対象として並立する傾向が強い。『建立縁起』は、神憑りして神の言葉を発し、国家的軍事を遂行、帰途に応神天皇を出産する神功の祭殿建立＝祭神化と八幡応神の同体関係を掲げており、それは託宣を得る女性祭祀者を輩出する辛嶋氏の職掌に大きく引き寄せられたものであるが、同時に、『護国寺略記』以降の八幡信仰への国家的祭祀の要請と期待に応答する宇佐宮祭神の神話創造であったと言えるだろう。
2.学術論文・学会発表等	①「『八幡宇佐宮御託宣集』の「神代」と「日本紀」」『日本書紀一三〇〇年史を問う』山下久夫・斎藤英喜編、pp.101-121、思文閣出版（２０２０年６月） ②「平安時代初期八幡信仰の展開――「弘仁官符」と八幡聖武同体説をめぐって――」（『歴史学部論集』１１、pp.107-122、佛教大学歴史学部（２０２１年３月）
3.今後の課題	『建立縁起』には、「弘仁官符」には見られない隼人征討および放生会起源説が記されている。なぜ平安時代中期以降、隼人征討と放生会が八幡神の縁起に語られるようになるのか、ということが八幡信仰の歴史的展開として問われなければならない。